

新しき村余録 (上)

今 井 信 雄

千曲川は信州を、群馬県境に近く北西に流れているが、途中“く”の字形を描いて水路を北東に変え、間もなく西下してくる犀川を併呑し、やがて信濃川になるのである。“く”

の字に屈折する流域一帯が、長野県更埴市であり、千曲・犀川二川に狭まれて、当時（明治・大正期）の、更級郡中津村があった。中津村は戦後、川中島町の一部となり、更に昭和四十一年には、市町村合併のため、旧名は長野市川中島町の中に解消してしまった。

もし、信州白樺派の揺籃の地を求めたとしたら、上記・中津村がそれである。つまり、信州白樺派の草分けの人、赤羽王郎と、笠井三郎との出会いは、この中津村小学校においてであり、それは明治四十四年、王郎が満二十五才、笠井が二十一才の時にあたっている。私が拙稿（「白樺派の周辺」、『地上』における白樺運動）で、しばしば触れてきた信州白樺派の動向は、何れも、この二人を中軸にして、様々な絵

模様を織りなしているのである。この絵模様を仔細に分析して眺めると、赤羽と笠井の色調には、かなりの相違がみられる。すなわち、赤羽が主観的衝動的情熱的な傾向を持つ芸術派であるのに対し、笠井は瞑想的思索的求道的な人生派ともいえるようか。前者が子供を愛して、徹頭徹尾、教育の場でも生き抜こうとしたのに対し、後者はキリスト教に帰依し、「新しき村」に共感の念を抱いて、その三代目の支部責任者を引き受けるなど、教育の埒外にはみ出している部分もある。こうした差異が、その後二人が歴任した学校の仲間、教え子に、それぞれ異った影響を及ぼし、それが信州白樺派を赤羽系笠井系というふうに、その色分けを可能にするのである。

しかし、両者は中津小学校での邂逅以来、互いに連絡をとり合って、白樺作家の講演会美術展覧会の幹旋などに奔走し、大正八年の暮れには、ロダンの彫刻二点、泰西名画の複製画二百点を借り出すべく、二人は手分けをし、志賀・柳・長与・小泉を訪問している。したがって二人には共通の友

人、後輩も多く、二つの系統とはいえ、同じ人間共同帯に住む隣人同志ともいえる。一志茂樹が二人の流れを指して、「一にして二、二にして一」(講演「信州教育と白樺派の運動」)と説明しているのは、如上の意味あいからであろう。二人のうち、どちらが先に『白樺』に近づいていたかの点について、赤羽は『白樺』を笠井に見せたのは自分だ」とはっきり語っている。笠井は理科をやった人であり、赤羽は美術学校の中退組であるから、『白樺』に近づいた機縁は、赤羽の方が先だったかと思われる。

ところで、赤羽・笠井の系統とは全く関係なく、武者小路を尊敬し、全財産を投入して「新しき村」に走ったのが、後に美術啓蒙書を沢山書いた中村亮平である。中村が長野師範を卒業したのは明治四十四年で、赴任した南条小学校は更級郡に隣り合った埴科郡である。この更級両郡は、信州を二分した場合、いわゆる北信と呼ばれる地方であるから、はからずも北信が信州白樺派の発祥の地ということになる。しかし、間もなく舞台は南信に移されて、その活動は一層の躍進をみせることになるのである。

中村亮平がどんな機縁で『白樺』に近づいたかは、現在のところ不明であるが、師範生時代から絵を描いており、入村の直前には個展を、後には頒布会を開いているところをみると、おそらく『白樺』の口絵を飾っていた泰西の名画に、彼も赤羽同様、多大な関心を抱いていたに違いない。両者とも、絵画を媒介にして『白樺』に親炙し、それが武者小路に

結びつくきっかけになったのではなからうか。つまり、この階程にいたるまでの経路は、中村も赤羽も同じ途をたどっているようにみえる。だが、次の階程に移ると、両者の径庭の差は顕著になってくる。すなわち、赤羽は武者小路から吸収した、美術愛好の精神と思想を、教育の分野に活かそうとしている。だから、彼の周辺に集まる「友達耽溺」の中心話題は、芸術を語ることであり、その感激を教壇に立って、学童を相手に反芻することであった。これに対する中村の「友達耽溺」の中味は、毎日毎夜集まっては、「村(新しき村)をさす」の精神・村と国家・村と戦争・村と共產主義など、いろいろのことを話し合う(中村亮平の手記「記録」)という点にあった。

私は、泰西の名画や、美術書や、かきかけの油絵やで、雑然とした部屋の中をながめて、そこに漂っているものは、白樺という雑誌のもつ雰囲気だと思った。そして、中村亮平は、こういう教養をふんだんに身につけた、いわば、その頃多かった白樺青年の一人だったのである。ただ彼の場合は、白樺派のもつ貴族的なところ、高踏的な芸術家気どりというものがなく、その一面である宗教的なところが強かった。——それは、すこし、きゅうくつで、やばったかった。

童話作家、塚原健二郎が、雑誌『とうげの旗』(二十号、

昭和三十四年十一月刊）に載せた自伝小説「小さな河」の一節で、この箇所は、中村に初めて逢った日（大正七年十二月）の印象を記した場面である。

中村の身边には、「白樺」という雑誌のもつ雰囲気」が漂ってはいたが、「白樺派のもつ高踏的な芸術家気どりというものがなく、その一面である宗教的なところがつよかった」という評言は、中村亮平の本質をよく衡いた適評である。あべこべに、赤羽には「白樺のもつ高踏的な芸術家」的要素が濃厚といえる。また中村が、「きょうくつで、やぼったかった」のに対し、赤羽は闊達でダンディであった。赤羽・中村、それに笠井三郎の誰もが、「白樺」という雑誌の雰囲気」をもって、それぞれの道を歩んでいる点は共通しているが、外への顕れ方にはかなりの相違がみられる。

たとえば、「新しき村」を基軸にして、三者の関心の度合いをみると、「村」にもっとも近い立場に中村、その対極点に赤羽、そして中間に笠井三郎ということになる。また、「新しき村」についてだけいえば、赤羽と中村はその両極端に対峙していたが、「教育」に「村」に傾けた情熱の積極性、行動性においては両者相通じるものがある。この点笠井は瞑想と理性の世界に生きる人であった。しかしまた、「中村」という人は、口でものをいわないで、目でものをいって人を動かした」と評する人があるが、その限りでは、中村は笠井の人柄により近いことになる。まことに三者三様で、単純に割り切ることは不可能であるが、この三人について共通

していることは、他人への感化力が極めて強く、魅力に富んだ、教祖的な人達であったということである。もっとも、教祖的であったことの度合いにもまた軽重の差が多少見られる。笠井は中村より、赤羽は笠井より、その色彩はなお強烈だったようである。

一口に信州白樺派といっても、その性格や動きには、実に複雑な多様性を孕んでいる。また、右にあげた三人の手のみによって、この多様性が醗酵されたわけでもない。そこには個性豊かな多数の人々の参加がみられ、それらの人々の思想性格人柄行動が縦横に錯綜し、もつれ合っていること、またそれにも増して重要な要因としては、目まぐるしい時代思潮の変転が、より複雑な陰影となって、信州白樺派の多様性を限っていることである。しかし、上記三名は、多彩な性格を示す信州白樺派の根元をなす三原色であり、複雑な構築の基礎をなす原型であることは慥かである。

さて私が、本稿の標題を「新しき村余録」とよんだ所以は、前稿『白樺』派の周辺」で触れた舞台と時点のみに限定して「新しき村」に言及したからである。舞台とは信州を指すことになり、限られた時点とは大正七年から十二年頃までをいうのである。

「周辺」といい、「余録」というも、所詮それは「白樺派」ならびに「新しき村」の外伝的論及の謂であるが、外伝を追うことによって、本伝の占める位置を究明してみようとしたのが、本稿を草するに当たっての意図である。

雑誌「新しき村」創刊号の日付けは、大正七年七月一日で翌月の八月号には同志四十三人の名前が報じられている。その中に見えている信州関係の者は、次の五名である。

信州埴科郡松代町代官町

中村 亮平

同夫人

S・S

諏訪郡豊平村広深山

宮坂 春三

長野市

M・M

中村は初めて赴任した南条小学校から、同じく埴科郡五加小学校、小県郡上田女子尋常高等小学校を経て、七年三月三十一日付けで埴科郡松代小学校に転任している。匿名のS・Sは、小学校教員島田茂穂、M・Mは長野師範の学生、宮本正彦である。

島田は中村亮平の入村直後、ごく短期間の間、名目上の支部責任者になっている。後、青雲の志を抱いて上京したが病を得て帰郷、天逝している。宮本は笠井三郎が目をかけていた教え子である。大正七年九月九日付け、安孫子の武者小路から宮本宛の手紙には、「……松木君（笠井三郎）に逢って君のことを聞いて君をすっかり信用することができたのです。君のことを全然ほめていました。ああいう人が入る（「新しき村」への入村を指す）といひのですと本気にいってくれたのでうれしく思いました。……学校のことを気にしまし

た。急ぐ必要はありません。時のゆるしを得た時に入って下さい……」とある。

島田・宮本の名前を頭文字にしてあるのは、『白樺』の美術館建設資金募集の応募者名簿にもよくみかけるが、その大部分は信州人で何れも学校の教師である。理由は、「村」の支部に刊事が調べに来たり、入村者に尾行がついたりしたのが、当時の「新しき村」に対する世間の観方であり、特に長野県にあっては、『白樺』を奉じる自由教育者の群れが、各地で問題をおこし、各方面からの圧迫が漸く表面化し始めた時期に当たっていたからである。

なお、同じ『新しき村』の八月号には、信州函館浜松地方に、支部が出来たことが報告され、そこに信州支部の責任者として中村亮平が登場してくることになる。この間の消息は、中村の手になる「記録」に一層精しく記されている。

「記録」はおそらく、次期の支部責任者に手渡すべく書かれたものであろう。支部の決定した大正七年七月十二日から筆を起し、入村五日前の、八年四月六日までの九か月間に亘る記述である。郵便十数枚に美しい書体でメモ風に支部の日誌を記し、末尾の数枚は、引きつぎの物品、会計報告、「村」への喜捨の内訳・パンフレット配布の覚え書き・信州支部の会員名簿・全国支部の所在地及び責任者一覧などが綿密に認められている。そこには、パンフレット一枚の行く方さえ書きこまれており、几帳面でありすぎた中村亮平の人間像をはっきりと際立たせている。しかし、この神経質とも思える刻

明きの裏に、彼と「新しき村」との、後の悲劇的な決別を読みとるのは、結果を知ってのこじつけ論であらうか。塚原ではないが、「すこし、きょうくつで、やぼったい」記録で、この「きょうくつ」と、彼の離村との理由には、すくなくならぬ脈絡があるように思える。

「記録」によれば、信州支部が決定してから、三日後にあたる七月二十五日に、浜松、函館、二十七日に大阪神戸京都の各支部が設立されたと武者小路から知らされている。「記録」の記載順序で支部が作られたとすれば、信州支部の設立は、全国各支部の魁ということになるわけである。本部の設置は、右の各支部の設立より少しおくれ、八月三十一日になっている。「或る男」の中に「東京に一軒家をかりて、其処に兄弟が三四人一緒に住んで、新しい本部をつくつた。それは随分粗末な家だつたそして其処で自炊してゐた」(原文のまま)とあるが、本部は本郷区駒込動坂六五で、兄弟四人の中には、国文学者石山徹郎の名前も見えている。

雑誌『新しき村』によると、本部設定の八月三十一日より少し日付けのさかのぼった八月四日、第三回の「村」の例会が東京で持たれ、諏訪の宮坂春三が初めて参加したとある。例会の模様については、寄せ書きになって、十一日に武者小路から支部にもたらされた。この時点においては、中村と宮坂とは未だ面識はなかったようである。

宮坂は諏訪郡豊平村出身で、絵心があるところから『白樺』に近づき、それが「新しき村」に結ばれる端緒となつたの

である。一時は二科会にも属し、一部の人々には、堅実な描写と清逸な筆致になる画風だと期待されたが、酒のためついに大成はしなかった。家庭的にも恵まれず、妻君には逃げられ、満州に流浪した後、うらぶれてまた帰国。中川紀元・石井柏亭が名前を連らねて画会を催したこともあったが、ついに陋巷に窮死した人物である。

ついで東京での第四回例会は九月一日、信州からは小学校教師掛川喜遊・笠井三郎・丸山鋭雄(現、盈進学園理事長)、外に小林と名乗る人物が参加している。この日の模様も寄せ書きとなつて、後日支部の方に届けられている。「記録」によると、この頃から、本部及び各支部からの寄せ書きは漸増し、ついには日に何通かの便りが届けられるようになる。通信の激増は、そのまま「新しき村」への関心度を量るバロメーターといえよう。そして、そこには一種の熱気が漂っている。各地の同志はお互いを「兄弟」と呼び、昨日まで未知であつた者同志が、「村」の理念に結ばれると、突如、他人という幕が切つて落され、誰にも増して親近感を覚える感激を、何度も何度も文書の往来によつて、たしかめ合っている。信州から乾し杏が送られると、静岡からは密柑が返送されてくる。初めてみる葉のついた密柑に、寒国の住人は、「兄弟」の愛情を改めて噛みしめるといつたような記事で、「記録」は埋まっている。こうした同志愛の意識は、共通の理想境設立の熱望となり、それが一つのうねりとなつて高揚している。

同志間のこうした動きの慌しさを反映するかのよう
 「新しき村」に対する世間の関心は、九月に入ると急激に高
 められた。四日付けの東京朝日新聞は、その五面に「武者小
 路氏の新しき村愈々日向に建設」と四段抜きで扱い、
 翌日は「白樺美術館の設立」について報道。十六日には、
 「新しき村の宣伝」と題し、武者小路の写真入り、三段抜き
 の記事となっており、翌十七日は、「愈々二十三日に出発す
 る 武者小路さんの為に 我孫子在の同邸で送別会」と二段
 抜きの記事を載せている。

武者小路が「新しき村に就ての対話」(第一、第三)、「新
 しき村に就ての雜感」を書いた大正七年の春以来、一部の人
 々の間では、武者小路が理想境を求め、早晚、新しい生活に
 入るであろうことは時間の問題とされていた。また世間一般
 も、かねてから武者小路が「東京から日帰りに行ける土地」
 を探していたし、「新しき村の生活」(七年八月十日、「新潮
 社」刊)の新聞広告には、「著者はその同志を糾合して某地
 に一邸を構え、純真なる人間性の要求に基ける生活によって
 理想境を建設せんとす」とあることから、理想境の建設
 が、いよいよ間近かに迫っていることを感知し始めていたに
 違いない。しかし、ひろく社会問題としてクローズ・アップ
 され始めたのは、新聞が大きく取り扱った九月以降というこ
 とになるであろう。

四月付けの朝日新聞の記事になった日向の候補地は、「西
 諸県郡高原から小林に至る東霧島山麓の幽邃な、高原的な、
 豊沃な、そして天孫降臨の靈場と伝えられる一帯の地」とい
 い、同じ紙面で武者小路は、「日向と決定しても場所は、はっ
 きり定めません。多分阿蘇山の麓の小松が好いかと考えてい
 ます」と語っているところを見ると、最後決定の地、児湯郡
 木城村石河内字城に決定をみるまでには、多少の曲折があっ
 たわけである。

日向に土地の目当てをつけた理由については、しばしば武
 者小路も書いてるように、新聞紙上でも、「第一日向とい
 う名が気に入る、冬も働けるのが気に入る、日本の最初に起
 った土地だというのが気に入った」と語っている。正直にい
 えば、右の条件に「その上、土地が安いというので、すっか
 り気に入ってしまった」と、いうべきであつたらう。

当時、東京からの日帰りは無理であつたにしても、武者小
 路とあれ程関係の深かった信州が候補地にならなかつたこと
 は、稿者のかねてから不審としていたところであるが、この
 紙上談話の中で、やはり日光(柳宗悦の推輓していた土地)
 と、信州が候補地として考慮された旨が語られている。

機は熟し、いよいよ九月十四日(土)午後七時、村の第一
 回演説会が、本郷追分の帝大基督教青年会館で開かれた。生
 憎、当夜は暴風雨であつたが聴衆は二百六十名、その中には
 大杉米の顔も見えていた(俳人、西島麦南談)。信州からは
 中村亮平、宮坂春三、島田茂穂が参会している。中村の上京

は、演説を聞くこともさることながら、日向の土地探しの一員として九州行きに加わる、その打合せも兼ねていた。土地の検分は武者小路、木村莊太それに中村亮平の三人であった。演説会のプログラムは次の通りである。

- 一 演説会を開くについて
 - 二 会員の一人として
 - 三 第二種会員の一人として
 - 四 無題
 - 五 散りたる兄弟達に
 - 六 村の力
 - 七 雑感
 - 八 新入会志望の諸君に
 - 九 感想
 - 十 村に入るに方って
 - 十一 未知の友達に
- | | |
|--------|-------|
| 木村 莊太 | 市橋善之助 |
| 木村 莊五 | 辻 克己 |
| 川島 伝吉 | 稲垣 芳雄 |
| 今田 謹吾 | 石山 徹郎 |
| 松本長十郎 | 木村 莊太 |
| 武者小路実篤 | |

長軀瘦身の武者小路は、羽織袴、ややいかり肩で壇上に行った。「村」の話の時には、袴はつけないと武者小路は語っているが、この日の武者小路はちゃんと袴を着用している。

鼻下に戦国の武將を思わせるようなひげをたくわえ、三十三才ではあったが頭の中央部は禿げ上っていた。西島麦南は当夜の感想を次のように語った。「短い時間でしたが、非常にリズムの高い話をされた。『これが失敗すれば、これはわれ

われの真心が足りないからだ』といわれたのには、深くうたれた」と。「或る男」には、「『この仕事で失敗すれば自分の恥だ』と彼は云ひ切った」とある。前記、九月十六日付けの朝日新聞の報道は、この夜の催しについてである。ただし、会員の真摯な訴えも、「宣伝」という見出しで扱われているのは、「新しき村」の受けとられ方を端的に示している表現とでもいえようか。

我孫子根戸での朝日新聞記者とのインタビューで、自己の使命感を述べ、「行っただけで帰えりません」とその決意を披瀝した武者小路の身辺は、日を追うに従ってこれまた熱気を帯びてくる。

九月十五日の日曜日には、我孫子の武者小路邸で日向行きの壮行会が開かれた。手賀沼を眼下に見下す庭で撮った記念写真を見ると、岸田劉生・長与善郎・児島喜久雄・清宮彬・古屋芳雄・木村莊太・莊五・莊八兄弟・抑宗悦・犬養健・近藤経一・恩地孝四郎・椿貞雄等の顔が西島九州男（麦南）、今田謹吾・永島直昭・萩原中・辻克己・石山徹郎等、初期の新しき村の同人と共に写っている。信州勢は中村亮平の外、宮坂春三、島田茂穂が加わっている。この日の模様を報じた朝日の記事はなかなか興味深い。

「新しき村」の主義・語弊があるかも知れないが、一つの思想を我孫子から霧島山の麓へ持って行こうという事は真実になって、十五日の日曜日には我孫子在の武者小路氏の家

に白樺派の同人は勿論、草土社の人達などが四五十人（写真では五十八人）程集まった。武者氏の送別会の意味だそうだが、集まりの人々のどの顔も極めて神経質な様なタイプの所有者である。思想の開拓はいいが、予備知識としてこの頃畑に出ているという武者氏自身の瘦せた身体が極めて皮肉的である。皆で「志賀は背骨が痛むといって来ないから寂しい」という。モジヤ頭の柳宗悦君の顔や、キョトンとした眼付をした長与善郎君やら、木村莊太君などの同人連を囲んで、学習院の制服やら、浅黄の労働服の同志やら面白い対照であった。蓄音機が鳴らされたが「サノサ」や「都々逸」が出るだろうと思うは俗物の考えて、凡てシヨッパンだとか何だとか、まことの音楽だけで、武者氏の蔵しているロダンの絵画、ミレーの画集など取乱された風物も人も新しい芸術の集団であらう。

お汁粉とうどんの模擬店が平穩に開かれた。仲々売れない。芸術家は品位ある個性を尊重するものだと思った。その中に五目並べとヘボ将棋が始まり、「相撲をやるう」と前の芝生に出たが「これだけは自信が無い」と骨立った肩を引込ませる。誰かしら二人出て始めたが、忽ち無理をして腕を折った。一同蒼くなって水だ医者だと騒ぎ「長与、どうかせんか」と胃腸病院の縁故からか武者が叫ぶ。「長与だって知るもんかと誰かが笑わせる。房子さん（武者小路夫人）や長与氏の妻君なども蒼くなって俄に悄気返る。村からやっと竹庵氏を迎えて来た。梨を剥く菓子を食べる所

へ千家元麿君が汗を拭き拭き来た。「夜になったら何かして遊ぼう」と武者は梨を頬張り飛び歩いてた。（後略）

少々、巫山戯ているが、第三者の眼に映じた白樺派及び「新しき村」の姿を写し得ているようである。写真の中に新聞記者が一名しか写っていないところをみると、この記事は「朝日」の特ダネだったのだろうか。この頃、村の土地が決まり次第、先発隊となって出掛ける人々に、辻克己・今田謹吾・萩原中・伊藤栄・横井国三郎の五名が指名された。

九月二十日は、隅田川河畔の鰻屋で、白樺同人のみで武者小路の送別会を催した。参加者は二十八人であった。

こえて二十三日は、いよいよ武者小路の鹿島立ちの日である。「午前十時十分東京駅出発。まず浜松下車。……翌二十四日午後二時より折からの珍らしい大暴風雨の中を、同市伝馬町のメソジスト教会を会場に演説会を開く。参加する者約六十人。」（中川孝「若き日の長与善郎の手紙」四）。武者小路の演題は「村に就いて」であった。浜松から夫人の郷里であった福井の竹尾家に立寄った武者小路は、同家に養女喜久子を預け、越後路を南下、二十八日に柏原駅で中村亮平に出迎えられている。同夜は、見晴らしのきく長野市の城山館で、歓迎晩餐会が開かれ、「白樺」の愛読者や白樺派のシンパが三十人程集まった。「一面識もない、信州各所の人が多かったが、溶けあう程なつかしかった。静かな席の底からも、静かなデリケートの情緒があふれていた」とは、『新し

き村』に寄せた島田茂穂の通信記事である。畏敬と憧憬の入
り交った眼をもって、武者小路の一手一投足を見守ってい
る三十人の人々の面持ちが想像できるようである。

二十九日は、同じ城山館で午前十時から一時間半にわた
って演説会が開かれた。集まる者二百人。その大部分は青年教
師の群れであった。午後の松本講演をひかえているので、武
者小路の外には宮坂春三一人がしゃべったのみである。この
日、午前と午後にわたる長野松本の武者小路の講演は、聴い
た人の心に、特に深い感銘を与えたようである。武者小路自
身の気持ちも、高揚の極といったところであった。大正三年
以来、信州は彼がもっとも数多く足を踏み入れた土地であ
る。気心の知れた人も、顔見知りの人も数多く見えている。
いわば武者小路にとって信州は、ホームグラウンドに帰ったよ
うな土地である。彼は壇上に絶句したままつたっていた事
も再三ならずあった。しかし、その間聴衆の中からは、しわ
ぶき一つ聞こえない程の静粛さであった。

彼は東京を発った日、その友人から、「君は人類の意志に
よって働くのだから、いよいよからだを大切にするようにい
われた」ということを、自信に充ち、確信的ないい方で話し
続けた。

武者小路のこの講演を聞けないで、切齒扼腕して残念がっ
たのが、前記塚原健二郎である。自己の進むべき道を摸索し
ながら、その道を求めあぐねて、青春の日の何年かを彷徨し
ていた塚原は、この頃、地方新聞「信濃毎日」の記者として

長野市に住んでいた。来る日も来る日も、心懊々として愉し
まずといった状態が、当時の彼の生活の全部であった。「文
学」に対する漠然とした憧憬を持ちながら、丁稚・新聞配達
・荒蕪地開拓・新聞記者というふうな、人生遍歴を続けて来
た塚原は、この時二十三才であった。こんな毎日を送ってい
る塚原にとっては、「武者小路来る」の飛報は「とつぜん、
歩いている道の上に石でもころがり出した時のようにあわて
た」(「小さな河」)のである。しかし、塚原が会場に駆けつ
けた時には、講演会はとくに終り、武者小路は既に松本へ
向っての車中の人であった。

私は失望したが、彼が一時間前に、この城山館の壇上
で、多数の聴衆に向かって愛の村の思想を訴えていたのだ
と思うと、この日頃の情眼が一ぺんに醒めたような気がし
た。

同僚の記者から、演説会の模様を聞きながら、塚原の心
中に去来した想いを、彼は次のように述べている。

いま、彼(武者小路)のまわりをつつんでいるものは、
その頃はやった天才ということばのもつ雰囲気であるよう
に思った。天才!

それこそ、私のながいあいだ、あこがれ、求めていたと
ころのものであった。

いずれも自伝小説「小さな河」の一節である。経て来た道は、それぞれ違っていたとしても、塚原のもったこの感慨は、今日この会場に集った青年教師達誰もが持った感銘を代弁するものであった。『新しき村』十一月号には、長野駅に武者小路を見送る誰もが、車窓に遠ざかってゆく武者の二つの目に「すいこまれてゆくような淋しさ」を覚え、いつまでもホームに佇ちつくしたとある。それ程、別れ難いような印象を人々の胸に刻みこんだのがこの日の講演であった。

松本での講演会は、夕刻から幼稚園を会場にして開かれた。演題は「新しき村に就いて」であった。三百人の聴衆は、熱意をこめて話す武者小路に魅了された。松本も長野も会場の雰囲気は実にしみじみとしていた。神戸の演説会について「或る男」に、「神戸でやった。その時、松本の演説がやした人があった。……松本は怒ってやめた。今度、後藤が又興奮して出て矢張り怒ってやめた。中村・木村が無事にやって、又松本が出てやじられた。」とある。武者小路を迎える心用意において、信州と他の地方とは著しい相違が見られるようである。それは長年にわたって培われた武者小路と信州との心の交流によるものに外ならない。だから武者小路も『新しき村』の六号で、「昨日信州に来た。信州は実に氣持がいい。ここからきつと何か生まれるという氣がする。何かを生まないではおさまらない顔がいくつも見える。たのもしく思っている」と語らざるを得ないわけである。「或る男」では、「信州で彼達は活氣のある人々に逢へてうれしかった」

と記している。講演後レストラン南小林で夕食を済ませた武者小路は、同夜、浅間の西石川に一泊し、翌朝七時に塩尻駅で中村亮平と落ち合い、共に京都に向かった。三十日は白樺派一門の常宿「信楽」に泊り、十月一日、三条の基督教青年会館で、午後七時から十時半まで演説会が開かれた。雨の夜ではあったが、聴衆は八百人も集っている。中村も弁士になって、「会員の一人として」と題した語った。この後、演説会は大坂神戸福岡と続き、地元の同志も含め、多数の弁士が壇上に立っているが、その演説内容は大同小異といつてよい。話の内容をよく伝えているものに、神戸の会場で配布されたプログラムがある。その中に、磯崎要一の筆になる演説会の趣意書が載っている。

自分達をほんとに生かし度い、この望みと祈りの内に私達は集まりました。今の社会は各個人の尊厳を無視して、機械と人間を同列に置いています。そのまゝの状態であきらめているのは、私達の短い尊い生命の冒瀆と考えます。私達は各個人がほんとに人間らしく生きるために、最も合理的な社会、そこでは個人と社会とが互いに相扶け、生かし合っているところを求めます。それには暴力は何の助けも与えてくれません。人々の心の内に、そういう生活に対する憧憬と、その実現の可能な信仰が強く根を張ってゆくことによってのみ、その望みに一歩ずつ近づけると信じます。私達は一つの正しい目的のために、必然的に集中され

た多くの真剣な人の働きには、充分期待をもって好い筈だと信じます。まず、私達の生活を根本から改めるために、最初は小さい農村をもって、仲間が住み、住めない事情の人は外から助けます。そして段々私達の住める土地を殖し、同じ望みに燃えた仲間を呼び集めます。この望みと祈りの内に、まず、私達が集まりました。そして熱心な仲間の数が、一人でも殖えることを願っています。―後略。

なお、この後の旅行日曆は、中川孝の考察「若き日の長与善郎の手紙」に精しい。その中から必要事項を摘記すると次のようである。

二日、夜七時、大阪の演説会。聴衆六百余。会場は土佐堀青年会館。中村亮平の演説は「私達の喜び」。

三日、神戸着。午後、同市花隈吉野館にて会員懇談会。夜青年会館にて演説会。聴衆約八百。この日の中村の演題は「ほんとうの道」であった。

四日、神戸発。夜、広島に着く。五日、広島を発って福岡には、夜到着。

七日、夜七時、福岡市記念館にて演説会。聴衆約二百。中村は「恵まれたる喜び」について話す。

いよいよ九日の朝、舟で日向に向かうことになった。同五時、土々呂に一行の端艇が着く、馬車で延岡へ。翌十日に目的地の一つであった小林に到着。

小林村について、「朝日」は次のように報じている。

十一日、候補地茶臼原を素通りして一行は小林村に直行し、実地見分のため十六日まで滞在するが、多分同地に決定する模様であるから、決定すれば茶臼原検分は見合せ、準備のため中村、加藤（九州から土地探しの一員に加わる。本名、勘助）両氏は一応引返す筈であると。

踏査は毎日、朝早くから始められ、日が暮れてもなお帰えないような日が続いた。「出る時は『今日こそは』と思つた。帰る時は『明日こそは』と思つた。……しかし思はしい処はなかつた」（「土地」と、武者小路は土地探しの苦勞を回顧している。なお、「土地」には中村・加藤について、「途中で二人、用があつて一先づ帰ることになった。一人は信州の小学校の先生で、自分の責任のある生徒を卒業するまで教育する為に、一人は佐伯の人で目の養生を兼ね、うちの用もある……」（原文のまま）と書いている。「或る男」にも同様の箇所がでてくる。

こえて十八日の「朝日」には、「現代化に失望、新しき村の建設者武者小路氏一行」と題して次のような記事が載っている。

……小林村に「新しき村」の候補地選定中の武者小路氏一行は、引続き村内数箇所の土地を検分すべく草鞋脚絆も着けず、役場書記の案内にて現場を踏査しつつあり、而も日向の原始的なる風物に慣れ戻りしに実地は大違ひにて聊か

失望せるものの如く、未だ建設地決定せず。武者小路氏は語りて曰く、大分方面より日向路に入り、意外に感じたるは比較的開化せる事にて思ったより現代的社會相を呈して居れり。日向と言へば、神代ながらの幽邃森嚴なる原始的の趣あるべしと想像せるに反し、風景は雄大なるも単調なるを免れず、自分等の「新しき村」の建設候補地として希望するは、余り人目に触れざる山あり河あり幽邃靜寂なる芸術的且つ実用的土地なるが、目下候補地が右選定条件に合致するや否や明かならず、同村に候補地を定め置き、更に茶臼原をも検討すべく、我々の「新しき村」に共鳴せるもの、目下百四十名あり。最初移住するは二十名位にて、先ず十町歩余りの土地を購入して堀立小屋を建てて住居し、当分の内開墾に従事し、漸次基礎を固むべく自分は暫く此の地に止まるべし。云々。

土地の売買価格をめぐるの村民の駆け引き、「新しき村」が危険思想の巢窟であるとの中傷などで、態度ががらりと変る村長、それに避遠の地の悪路を廻る苦難、廻ってみても恰好の土地を得られない焦躁など、「村」が誕生するまでの道程は遠く、且つ想像以上の苦しさをもなっていた。

さて、いったん帰郷することに決めた中村亮平は、帰路を中央線にとらないで、東海道線を迂回して松代に帰っている。土地検分の中間報告を、東京の本部に知らせるためであった。十九日は支部のある浜松を通過。六分停車の時間を惜

しんで、会員は「村」検分の経過を中村に訊ねている。

四

かくして、「新しき村」が、宮崎県児湯郡木城村石河内字城に決定したのは、大正七年十一月十四日である。本郷の基督教會館で村の演説会を開いてから、ちょうど二か月を経て、踏査の一行は武者小路、木村の外に新たに二名を加え、計四名であったが、初めて石河内城を峠の上から見下した時の感激を、「或る男」では、こんなふうに述べている。

彼等は、やがて近道の方へ折れて五六間行つた時、彼等は歓声をあげた。彼等は其処に川に三方がかこまれた土地を見出した。

「あの土地です」津江さんは云ふ。

「あれですか」

四人、ぶつかる処にぶつかったやうな気がした。

津江さんとは、津江市作（昭和四十三年四月六日、百四歳にて長逝）のことであるが、この日の津江の感懐は、もっと印象的である。「径三十裡もあろうかと思われる赤松の根方に佇った時、突如、眼界が開けて石河内の部落が見えた。三方を碧緑色の小丸川に囲繞された「城」は、さながら神秘境の感すらあった。武者小路先生は一言、『ここだ』と即座に決定された」と津江は語っている。今年（昭和四十三年）、

新しき村五十周年を迎えるにあたって、木城村では記念碑を建てる計画をすすめているが、その候補地の一つはかつて赤松が生えていた右の地点である。値段の折合いもつき最終決定をみた十一月十四日は、ロダン生誕の日にもあたっていた。それは村人にとって単なる偶然事ではなかった。ロダンは、白樺一門が日頃讃仰してやまなかった天才である。過去のあらゆる権威者にも増して新時代を象徴する“God”であった。村の兄弟にとっては、「村」とロダンとの生誕が重なり合ったのは、「村」の発展を約束する瑞祥に外ならなかった。歎びは倍加された。と同時に、神の摂理に導かれた使命感をすら覚えて、彼等は敬虔な気持ちにひたっていた。「その時、わきにゐた妻が恥かしがる程自分は嬉しさうな顔をした。自分達はすぐ皆のゐる家に出かけた。皆、万歳、万歳とよろこんだ」とは、「土地」に書いた武者小路の回想である。翌十五日、土地決定の報は「イシガウチニキメルパンザイ」の電文となつて本部に飛び、更に本部から函館外七か所の支部に伝達された。信州の受信は十八日であったが、中村は受信すると、直ちに支部会員に連絡をとった。翌十九日は、本部移転（東京市外池袋一の九二）の通知と共に、横浜・京都の兄弟達から歎びを頷ち合う便りを受け取っている。土地決定のこの日を契機に、県内会員の会合及び往来、各支部会員からの通信往来も頻繁の度合いを加えた。「いよいよ恐ろしい時が始つたのだなと思つて、今更ながら緊張」（大阪、今西愛三）。「土地が決つた。いよいよこれから面白い時

が来る。兄弟万才、新しき村万ざい」（京都支部、忠平書く）

聖き朝 我等は君と（小泉）

うちつれて 今ぞ行かばや（武安）

あかねさす日向の国の神つ地に清き心を捧げつつ（佐野）

以上横浜）

何れも信州支部に寄せられた書簡で、まさに感激、興奮の坩堝といったところである。同志にとっては、この日を千秋の想いで待っていたのであるから、その心情の動きは無理からぬものと思われる。土地が極まり次第、出発する手筈になつていた先発隊の辻克己は、この日が待ち切れず「今日会社をやめました。とても腰をおちつけてはいられません」と焦躁の心を吐露し、伊藤栄は「もうぼつぼつ動き出すつもりです。先発隊の連中は皆、支度を整えて待っています。決つたら万々才の電報が来る筈です。愈々、動員令の下つた形で心待ちに待っています」と、張りつめた心情を中村に書き送っている。こんな情勢の中で「土地、決まる」の報が飛んだのであるから、溢れ出ようとしていた水が、遮二無二流れ出したとでもいった形容が相応しい同志の姿であつた。

興奮は同志ばかりではなかった。さまざまな形をとつて、中村の周辺も動き出していた。中村を招聘して話を聞きたいという学校（上伊那郡飯島小学校）、日向の人達に、何等かの形で援助をしたいと思うがどんな方法がよいかと訊ねてくる人（大分県西国東郡高田町小学校光門英嗣）。「この人はその後村に遊びに来てくれた、その時もう肺がわるかつたのに、

皆がとめてもきかずに働いて帰って一年程たつて死んだ。知
つてゐる人は皆惜しがった。実にいい人だった」と「或る男」
に書かれてゐる。今すぐ一種会員となつて入村したいと申
し出してゐる人（東筑摩郡和田村小学校、野村武夫）等の書
簡は、殆んど連日に及んでゐる。

一種会員とは、すぐ入村を希望する人、二種会員の方は、
「村」の趣旨に賛同し、暫らく村外にあつて「村」を援助す
る会員をいうのである。

中村亮平の「記録」に記されてゐる会員の氏名は次の通り
である。

第一種会員

上水内郡朝陽小学校訓導

掛川 喜遊

上諏訪町湯の脇

宮坂 春三（前出）

長野師範学校学生

宮本 正彦

笠井三郎の教え子。更級郡教育界の次代を担う俊秀の一
人として期待されていたが、郡教育会のライバル、馬場源
六との鞘当てを避けて渡満するも、終戦時行方不明。

松代町紺屋町

塚原健二郎

信濃毎日新聞記者、後童話作家となる。

長野師範学校付属小学校訓導

田中 嘉忠

付属小学校にて実験学級担当、「地上」「創作」の同人。

クリスチャン。

東筑摩郡和田小学校訓導

野村 武夫

塩尻小学校訓導

小林多津衛

埴科郡松代小学校訓導
中村 亮平
清野小学校訓導
中村みさは

中村亮平の妻女。

第二種会員

埴科郡松代小学校訓導

島田 茂穂

小県郡青木小学校訓導

飯森 弘

後北佐久郡教育会の重鎮となる。彫塑を石井鶴三に学ぶ。

上田町新参町

佐藤 憲三

埴科郡松代小学校訓導

馬場 源六

後、更級郡教育会会長、県学務課長。

小県郡弥津村西町

高橋よし美

東筑摩郡宗賀小学校訓導

松島 八郎

後、下伊那郡教育会会長

「記録」に止められている名前は、以上十五名であるが、
この後、大正十一年までの入会者の中で、左の人々の名前
が明らかになつてゐる。

上高井郡高甫村

後藤 勝

北安曇郡平村二つ屋

宮崎ともゑ

更級郡塩崎村

青柳義千代（本名、義智代）

後、「曠野社」に入る。現在、中野区宝仙学園校長。

村上村

久保 源一

〃

滝沢 貞人

東筑摩郡塩尻村

山辺 豊一

諏訪郡

上条 寛雄

後、共產党入党。保育園など経営。

” 境村葛久保

下伊那郡伊賀良小学校訓導。

西筑摩郡山口小学校訓導

小林 判治
一志 斐雄
松川伊勢雄

笠井三郎の教え子、後長与善郎の家に寄食。岸田劉生に師事。

上伊那郡朝日小学校訓導

市川 慶蔵

笠井三郎の教え子。後、更級郡教員組合執行委員長。

上伊那郡南箕輪小学校訓導

宮坂 栄一

笠井三郎の教え子。後、仏蘭西書院経営。雑誌『白樺』の

大正十二年四月・五月・六月・七月・八月号発行者。）

東筑摩郡山口村

神通川喜市

小林多津衛の教え子。後、村越姓を名乗る。現在、共產

党より立候補して、新宿区区会議員となつて。

南安曇郡梓村

平林英子

作家、中谷孝雄と結婚。

東筑摩郡芳川村

百瀬 操

後、村の会員上田慶之助と結婚。

右の人々の中で後の入村者は、中村夫妻の外、塚原健二郎・

久保源一・小林判治・上条寛雄・平林英子・百瀬操等であ

る。入村の事実如何に拘らず、これらの人々の半生、乃至生

涯は、何れも数奇な運命をたどっており、各人については、

ゆうに一巻の小説が編める、いわば大正期のアウトサイダー

の群れである。各人がその人生を如何に歩み、どうして「新

しき村」に関り合いを持つにいたったかを究明する必要があるが、私には荷が重すぎる問題である。後に下伊那郡教育会長になり、松島天皇こと松島八郎。同じく進駐軍、軍政部教育官ケリーと共に、終戦直後、未曾有の校長、教頭の鹹首格下げを断行し、一方、教員組合の弾圧に辣腕を振って、これまた馬場天皇と異名をとった馬場源六。またその弾圧下にあえいだ市川慶蔵。『白樺』からの脱皮を叫び、恩師笠井三郎のヒューマニズムの教育は、自分の人生にとって迂廻行路だったと洩らし、戦時中、渡満したが横死したと伝えられる宮本正彦など、そこには、まことに多彩な人生劇場が構成されている。入会者の顔振れの中には、中村の妻以外に、四人の独身女性の名前が見えているが、このことは、「新しき村」に対する、当時の女性の関心を物語っている。中村亮平の自伝小説（「死したる麦」）には、四・五人の女子青年の集いで、「新しき村」に何かと青春の夢を托して語り合っている場面が描かれている。同じく塚原健二郎の「小さな河」には、中村と塚原が入村する直前、松代町の壮行会場に、東京から馳せ参じた女性、小松きくえのことが書かれている。小松きくえは中村に一種会員になりたい旨を申し込むと共に、塚原の愛の申し入れをためらっていた小松チマ子（信州出身、当時東京在住）の、一種会員としての入会をも併せ伝えている。このことはチマ子が、塚原との結婚をも、暗に承諾している意志表示でもあった。塚原の感慨は次のように続く。

私はここにいま、日本にひろがっている、新しい村の運動の波の高まりをはっきりとみたと思わないわけにはいかなかった。私は神戸や、京都の村の演説会に集まった聴衆の中に、いつも多数の婦人の交っていたというキカン誌の六号の記事を思い出した。そして、チマ子のような、いわば、平凡な家庭の娘にすぎない婦人までも、この時代の波はまき込んでしまった。もちろん、直接の動機は、私にあるであろう。けれども、それだけではない。私は、他のもう一つの契機をなしたものに、この小松きくえがあるような気がした。私は彼女は貧しいのだと思った。貧しく、不幸であるが故に、新しき村にひかれてゐるのだ。……案外、このような婦人こそが、忍耐がよく、理想の村のキノを築く人であるかも知れない。

「日本にひろがっている、新しき村の運動の波の高まり」は、やや誇張の多いことばのようにも聞えるが、中村の「記録」からも窺えるように、この時代のある趨勢を物語る事象といひ得よう。「新しき村」の運動、運動といつて悪ければそれへの関心は、大正七年末という時点においては、今日からの想像をはるかに越えるものがあつた。ただ、今日から振り返ってみて、この運動が際立たないのは、この運動に踵を接して押し寄せている社会主義的な思潮の中に、その大部分が吸収乃至は拡散されていったからである。第一次大戦後の不況と、米騒動などが起つた酷しい世相の只中であつては、

人類の使命や、人間愛を説いている「新しき村」の運動は、現実離れのしたなまぬるい、空想的社会主義として忘れ去られていったのであらう。

私はさきに、赤羽・笠井の信州白樺派と、中村系とでは、その流れを異にしていると述べたが、この頃から両者の接触が見え始めている。中村の「記録」によれば、「村」のために笠井三郎から千円の寄付があつたのは七年の十二月十日である。「村」の寄付は原則として一口が五十銭であつたから、千円とは法外な寄付金である。この日の寄付金報告は、八年の「新しき村」三月号に出ているが、信州以外の金額の総計は、百十五円拾銭にしかならない。大正七年は、小学校教員の初任給は二十五円であつた。もちろん、献金は笠井一人でなく、「地上」系の小学校教師達からの募金である。

前稿（「白樺派の周辺」）で触れた小林多津衛から、中村のもとへ初めてハガキ連絡のあつたのは八年の二月であつた。一種会員の申込みであつたが、実は七年の十一月に、小林は支部には関係なく、「新しき村」へ赴いている。その春長野師範を卒業し、東筑摩郡塩尻小学校へ赴任したばかりで、年は漸く二十三才であつた。学校は無届欠勤、「村」にも前触れをしないで、荷物、蒲団を先送りにして出発している。途中、木曾の上松駅で中川一政・椿貞雄と会い、そのまま下車して共に一泊。福岡まで行を共にし、そこで後期印象派複製画展の手伝いをした後、千代の松原に病氣療養中の倉田百三を訪問した。日豊本線は未だ完通していなかったから、熊本

を経てローカル線妻線に入り、当時の終点妻駅に下車、悪路三里の道を茶臼原の孫児院に立寄ったりした後、高城町の深水館に、ようやく武者小路を訊ねあてている。しかし、牀の変調をきたしたので、人々に迷惑のかかることを懼れて再び妻に引返したが、そこでまた、悪性の感冒で寝込んでしまった。いわゆるスペイン風邪(世界風邪)である。此の間、眼のあたりに見て来た高城の生活を検討し、自己の集団生活に適さざるを感じて、再び信州に引返したと彼は語っている。帰郷の旅費は武者小路からの借金である。彼の病臥中の苦痛と孤独をいやしてくれたものは、聖フランシスの「小さき花」であった。後に彼の教え子達の手になる同人誌「小さき花」は、此の日の彼の思い出に基づく命名である。

小林の無届欠勤を一言もとがめず、温かく、そして度量も大きく迎え入れてくれたのは、後の信濃教育会長斎藤節であった。

小林の備忘録には「この年、聖フランシスのフラアになり、行乞せんとして甲州を流浪、遂に人の家の門に立てず、寂然として帰りしことあり」と記している。敬慕する一人の姉を亡くし、人生の寂寥相に触れた小林が、「人生如何に生くべきか」に思い煩うた揚句が「新しき村」への入村志望となったのである。武者小路の目ざした「新しき村」は、「人間万才」式なもっと明るい理想境であったが、それに身を投じた、たとえば中村亮平にしろ、小林多津衛にしろ、「村」に求めたものは、もっと宗教的で、悲愴感の漂った決意から

生まれたものである。この点、川島伝吉が「その時分の私に考えられた新しき村とはどんなものか」というと、克己的な道徳的な、簡易生活の行われる、どこかの修道院の生活にでも似たものにもなるのかと思われたものだった。節制を重んじて健康を保ち、進んで労働することで淫らな妄想にうち克って神をほめ、自然と人間を讃美する時間の余裕のある、文明の利器もと入れた進歩的な社会を此の地上につくろうとして努力される処なのであろうという風に思われたのだった(「日向の村の思ひ出」と述べているのと、相通うところがある。事実また、「新しき村の生活」の出版広告の結語は、「如何にして正しく活く可き乎に思ひわずらう人は、速かに本書に來れ」と広く世間の求道の士に呼びかけた内容である。

しかし、「村」の性格を形成している一面には、自分が斯くありたいと願う生活——それは文学・絵画・音楽を語ることであり、また自らもその創造創作に参加することであった。この芸術面への傾向が比較的顕著な一派をかりに芸術派と呼べば、前者は宗教派とでも名付けられ得よう。どうも小林などの入村しようとした動機の中には、せっぱつまった、「どこかの修道院にでも似たもの」を求めていた節がうかがえる。この二つの傾向の間隙と違和感が、後に繰り返される村のトラブルの原因の一つになっているようである。この点については、もう一度後に触れるつもりである。

小林が「自己の集団に適さざるを感じ」てとは、どうい

判断から帰結し得た結論が測りかねるが、二つに色分けできる「村」の傾向に加えて、風土、気候の異なるさまざまな地方から、雑多な職業に従事し、想像もできないような過去を経て来た人々の集団は、師範学校の寄宿生活しか経験していない小林にとっては、あまりに複雑すぎて、直ちに馴染みにくいものがあつたに違いない。雑然とした、そんな「村」の様相が、小林をして「村」の建設の容易でないことを直観させたのではなからうか。

五

「村」の検分を終えて帰郷した中村亮平の身邊は、更に忙しい動きをみせ始めた。学年のきれを待つて入村することは既定の事実となつてき、その日を迎えるまでの三か月は日を加えるに従つて狂熱的になつていった。松代町代官町の中村の住んだ武家屋敷には、毎夜同志が集つた。その大部分は小学校教師であつたが、塚原健二郎の顔は毎回見られたし、時には文学好きの町の医者顔もまじつていた。話題はきまつて、九州の村の様子、東京本部及び各支部の動静であつた。村の情報を書いて、些細なことにも一喜一憂している。当時の宮崎県の地方新聞「日州新聞」が送られてくると皆してむさぼり読んだ。「新しき村」の後記で武者小路が、村の経済は極度に窮乏して、当分一人当り六、七円的生活費しか割り当てることができない。従つて、手紙やハガキを出すことも、公用以外は制限の必要がある。二種会員からの援助を、

毎月五十円位と予定しているが、それが集まらないと、われわれは栄養不良になりかねない旨を述べると、中村は集つた人の全部に、封筒はりや、観世よりの作業を課したりしている。各地の同志からお菓子を集めたり、零細な金を「村」の砂糖購入費として送金したりもしている。そこには息苦しいものさえ動いていた。繰り返すことになるが、いわゆる「村」の芸術派の仲間とは、その雰囲気にな大きな懸隔がみられるようである。

一月十四日には、村から正月の鏡餅が二箇、送り届けられた。糯米の収獲は未だない頃であつたから、米は買ひ入れたものであろう。しかし同志は、日向から遙々届けられたお餅であることに感激した。お飾りは中村の手許に、大切に保存されて、訪う人の誰もが見せられ、見せた者も見せられた者も共に喜び合つた。それから二十六日を経た、二月の九日に「日向からのお飾りを戴いたり、皆で喜び合いたい」ための会合が開かれた。長野に奉職していた田中嘉忠は、往復二十四軒の道を歩いて参加している。また止むを得ず不参加になつた馬場源六からは「ユカレヌメグミアレ」の電報が届いている。塚原の自伝小説「小さな河」には、「私たちはひとりあて、三センチにも足らない餅を、あらたかな、御供か何かのように、味もつけずにやいてくつた」という記述がみえる。また、この日参加できなかった笠井三郎、その他の兄弟達には、お餅は細かに刻まれ、封筒に入れて発送された。受け取つた側の、感激に満ちた中村宛の礼状が今も残つてい

る。

この会の直後、中村は後事を托すべき支部責任者の銓衡に手を初め、まず赤羽王郎に白羽の矢をたてた。しかし王郎は、その頃戸倉事件を起し、教職追放になる直前であった。

二月十三日付けの王郎の書簡には、「若しこんど退職か休職になれば、どんなことになるか、一寸見当がつきませんか、甚だ遺憾ですが、どなたか他の人に決めて下さい」とある。戸倉事件もさることながら、王郎には「新しき村」に対する、危懼の念が動いていたことも辞退の一つになるが、今は触れない。王郎が駄目だと分ると、中村は直ちに笠井三郎に交渉を試みた。「十六日の御ハガキを見ました。今直ぐ御返事が出ない事情にあります。……僕が出来ない事情になったら、田中嘉忠君を煩わすことはどうでしょう。僕は最も適任ではあるまいかと信じます。田中君か僕か、何れかに任かして下さるなら、この際、お引き受けしてもいいのです。

……」との返事があったのは、大正八年二月十九日で、中村の入村までには、あと二か月とはなかった。後、支部の責任者は、結局、笠井三郎がバトンを引き継ぐことになるのだが、笠井の病氣、転任問題等のため、中村と同じ学校に勤め、同じ町に住む島田茂穂が、暫らく、「村」関係の庶務を代行することになるのである。

かくして中村は、先祖代々の家屋敷を蒼惶のうちに処理し、春だというのに、未だ雪のちらついている木曾路を車窓に眺め、もう螢がとんでいるという「城」に想いを馳せなが

ら、日向に向ったのは、四月十一日であった。

本稿を草するに当って、その資料は宮本邦彦氏に、その間の幹旋には市川慶蔵氏に大変お世話になりました。厚くお礼を申し上げます。